第15回　日文研フォーラム

■

江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題

Smallpox Deity and Smallpox Pictures in Later Edo Period

■

ハルトムート O. ローターモンド
Hartmut O. Rotermund

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長　梅原　猛

● テーマ ●

江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題

Smallpox Deity and Smallpox Pictures
in Later Edo Period

● 発表者 ●

ハルトムート O. ローターモンド
Hartmut O. Rotermund

発表者紹介

ハルトムート　O. ロータモンド
Hartmut O. Rotermund

フランス国立高等研究院教授

１９３９年生まれ。１９５８－６４年ヴュルツブルグ、ボンヌ、ハンブルグ、パリ各大学で、日本学、支那学研究。１９６２－６４年東京教育大学聴講生。１９６７年6月ハンブルグ大学ドクトル学位獲得。１９６７－６８年ヴュルツブルグ大学日本学講師。１９６８年2月以降フランス国立高等研究院宗教学部日本学主任教授、現在に至る。

１９７３年日本宗教・民俗学研究所創立。１９８３年パリ大学文学博士学位獲得。専門：日本宗教史、説話文学、民間信仰。

主な著書：

○Die Yamabushi. Aspekte ihres Glaubens, Lebens und ihrer sozialen Funktion im japanischen Mittelalter. (Hamburg, 1968) 中世山伏の研究（独文）

○Majinai-uta.(Hamburg／Tokyo,OAG,1973)咒歌研究（独文）

○Shasekishu, traduction et commentaire.(Paris,Gallimard, 1979) 沙石集（仏文）

○Pèlerinage aux neuf sommets. Carnet de route d'un religieux itinérant dans le Japon du 19e siècle.(Prix Hebert Allen Giles de l'Academie des Inscriptions et Belles-Lettres 1985)(Paris,CNRS,1983) 野田泉光院著　日本九峯修行日記（文化年代）研究（仏文）

○Hôsôgami ou la petite vérole aisément.(Paris, Maisonneuve Larose,1991)疱瘡神研究（仏文）

編集：

○"Cahiers d'Etudes et de Documents sur les Religions du Japon."(Vol. Ⅰ～Ⅷ publiés par le Centre d'Etudes sur les Religions
et Traditions Populaires du Japon／Ecole Pratique des Hautes Etudes,1979 sq.)

○Religions, Croyances et Traditions Populaires du Japon I: Aux temps ou arbres et plantes disaient des choses.(Paris, Maisonneuve Larose,1988)(sous la direction de)日本古代宗教史読本（仏文）

その他、論文多数

はじめに

奈良時代から度々日本を襲った疫病の大きな波の中で、まず目につくのは疱瘡とハシカであります。この疫病は不定期的に発生しましたが、殊に江戸中期、つまり十八世紀にかなり頻繁に襲ってきたことは、歴史上の事実です。中でも、江戸、大坂、京都の三大都市に多数の被害者が出たことは、都市への人口の集中と増加にかかわりがあると思います。当時の人々は、このような疫病は日本から遠く離れたエミシ（蝦夷）とかエビス（夷）といった野蛮な国から来ると考えていましたが、確かに大陸との接触を介して疫病が進入したことも歴史的な事実でしょう。

ですから、江戸時代の多くの文献に見られる「まじない」や民間治療法には、疱瘡にまつわるものが当然多くなっています。そこで、封建時代末期の社会における疫病に対する認識を検討し、疱瘡をめぐる信仰の諸要素を調べ、いくつかの疱瘡絵の内容を分析してみたいと思います。

山伏と疱瘡

まず十九世紀のある山伏の旅日記を通して、当時の疱瘡対策の二、三点を検討

してみたいと思います。その日記は『日本九峰修行日記』といって、著者は野田泉光院という九州のある山伏寺の住職で、大先達でありました。その山伏は六年間にわたる廻国を通じて、この疫病に対する人々の様々な対策を観察する機会を多く持ちました。

例えば、ある日の、日記にはこのように書いてあります。あらすじを言いますと、ある村に丁度疱瘡が流行ってたのですが、村中たいへん賑やかで、屋敷のまわりには赤い紙の御幣と注連縄が張ってありました。また、庭にも赤い御幣を立てたり、家の中にも御幣がたくさん掛けてありまして、村の人たちは三味線と太鼓で疱瘡踊りをしているのです。その注連縄や赤い御幣は、様々な疫病との戦いの中で、民衆の創造力がつくり出した伝統的な厄除けの手段であります。疱瘡踊りは、踊り手に引き立てられて、疱瘡神が村を去るように促すもので、これは一種の神送り、疱瘡神送りと言えるでしょう。

野田泉光院は他のところで、現世利益で有名なお寺とか神社への巡礼にも触れています。例えば、彼が出雲地方を回った時の鷺大明神の社の宗教的な習慣を記しています。出雲の鷺大明神の近くに住んでいる人たちは、疱瘡予防のために、その社にお参りして境内の小石を拾って持って帰るのです。そして疱瘡が去った

後、その小石を社に返納するのだそうです。

この習俗は、いろいろ他の文献にも出て来ます。例えば、『鷺大明神疱瘡守護之記略辞』という文献の中には、次のような歌があります。

イモハシカ　カロキオモキモ　ヘダテナク　マモラムサギノ　カミニワノイシ

また、『出雲国大社鷺大明神疱瘡守御笠』という文献がありまして、その中には、子どもたちがまだ疱瘡にかからないうちに、その被りものを被らせると疱瘡にかからない、と書いてあります。また同じ文献に、疱瘡神祭りは十二日間しなければいけないとも記しています。

国学の大家である本居宣長は、『古事記伝』の中でこの笠に触れています。それによりますと、疱瘡が軽いことを祈願する人は、鷺大明神にお参りし、そこの笠を借りて帰り、家で信仰するのです。そして、全快の後は、もう一つ笠を作り、借りてきたのといっしょに神社に返納する。次の祈願者はそこから一つ借りて帰って、二つにして返す。その繰り返しで笠はどんどん増えてくる、と書いています。

本居宣長は更に、サギという言葉の語源に言及し、貝原好古の『和爾雅』を引用して、因幡の「白うさぎ」との関係を指摘しています。そうだとすると、鷺大明神の利益が、疫病治しであることが理解されてきます。一方、天草における疱

瘡神信仰に関する浜田隆一氏の小論文では、「鷺大明神」と、疱瘡対策に登場する「うさぎ」の役割と、「鹿（古語でカセギ）明神」を、ある意味で同一化します。語源分析に全く疑問点がないというわけではありませんが、鷺大明神、鹿明神、うさぎには、さく、さぐ、ふさぐ、といった形態素がいずれにも含まれている、との結論に達しています。

それはともかく、話を鷺大明神に戻しますと、神社の周辺の住民たちの行動は、小石を拾うことを媒介として、神社の現世利益的な徳を手に入れるという、ごくありふれた、呪術的なものと言えるでしょう。また、疱瘡守としての笠というものは、病気の「瘡」と同音であることから、特に効果的なものであります。

『日本九峰修行日記』には、その他にも様々な疱瘡対策が見られます。ある所では観音式会、またある所では欅崇拝であったりしています。また疱瘡の広がるのを防ぐために、旅人を遠回りさせたり、病人を山奥に捨て置いたりすることが記録されています。次の記事は、ある時病気になった山伏を訪ねていった時のものですが、加持祈禱を行うべきか否かの問題を含んでいます。「安祥坊疱瘡見舞いに行く」と書いてありそれから「安祥坊疱瘡六ケ敷故に祈念す」。祈禱とは書いてないで、「祈念す」とあります。「本尊の前甚宜しからず。又寝むたきこと限りな

し。祈禱気遣はしきに因り、平四郎（野田泉光院の荷物を運ぶ強力）を見舞いに遣わしたるに」、昼過ぎ亡くなったと書いてあります。それで、翌日「中町へ平四郎を悔みに遣はす」とありますから、同じ山伏仲間が疱瘡にかかって亡くなった記事なのです。

「呪歌」の構造

以上のような出来事とは別に、旅中の病一般に対して面白いことが読み取れます。それは、一般の人の病に対しては、山伏が「まじない」を使う記事がよく出てきますけれども、山伏自身が病気になった時には、必ず薬を使ったりお医者さんにかかる、という点です。つまり、「まじない」する人は自分を治せないということで、これについては四、五年前に出した本の中にも少し書きました。

修験道にはご承知のとおり、呪術的療法がたくさんあります。そして修験道の病気治しの中には、当然疱瘡とかそういう疫病もたくさん含まれています。その手段といいますと、多くは「唱えごと」とか、「呪歌」であります。例えば『修験深秘行法符呪集』という文献の中には、次のような「呪歌」があります。

ムカシヨリ　ヤクソクナレバ　イモハシカ　ヤムトモシセジ　カミアキノウチ

この歌の呪的効果の基盤となっているものは、遥か昔からの神々との約束でありまして、一種の他力の考え方と言えましょう。この歌には異文のものが多数存在していますが、このことは、いかにこの歌が好んで用いられたかを証明しています。

「咒歌」を分析しますと、そこには共通の語源的表現がはっきりと表れていると思います。まず、何を対象としているかということが、はっきり表わされています。先程の歌ではイモとハシカであります、次にその目的は何かというと、「シセジ」、死なないということをはっきり表現しなければならないのです。また「ムカショリ」という言葉は、神々との約束を強調するための決まり文句です。それと、「カミアキノウチ」という言葉は、話者と病をはっきり分離させるための言葉です。つまり話者のいる場所は神垣の内であるから、病は入れない、疱瘡のような疫病は入れないということです。呪術的に言えば、その場所の変質であります。話者がどこにいても、「ここは神垣の内」と決めれば、もう病気は入って来られないという呪術的な考え方です。また万一疱瘡にかかっても、死は免れるということ、つまり軽い疱瘡で済むということは、「ヤクソクナレバ」が示すように、神々が必ず守らなくちゃならないことなのです。以上は、「咒歌」の呪的な働きの基本

的な要素です。

次の歌には、神々の加護が比喩的に表されています。

フルアメニ　ミノカサモキヌ　マゴノコノ　ヌレヌ　モ　カミノ　メグミ
ナリケリ

また疫病の退散を唱える歌もあります。

チハヤブル　カミノオシエノ　カゴナレバ　ハヤルモガミヲ　サシノケゾ
スル

ある修験者の『疱瘡呪守』という文献には、次のような様々な方法が出てきます。

まず、護身法と般若心経というごくありふれたものから始まって、

モガミガワ　キヨキナガレノ　ミズナレバ　アクタハシズム　ヌシハサカ
エル

という有名な歌が出てきますが、その次に、いろんな「唱えごと」が出てきます。例えば御札に書く文句として、「越前国湯尾峠東の茶屋孫嫡子」といった有名な言葉その下には、小さく「人は病むとも我は除くぞ」という面白い文句が書いてあります。この文句は民間信仰の中には普遍的に出て来るもので、人はどうでもい

いから、自分だけは助かりたい、という考え方ですね。次に、門（かど）に貼る札としては、次のような歌があります。

ワガナアル　カドサトハヨケヨ　ホウソウガミ　ナキサトナラバ　トニモカクニモ

直訳すると、私の名前があるところは早く通り過ぎなさい、名前がない里ならどうでもいいけど、といった所でしょうか。この歌にはたくさんの異文もあるんですが、ここで注目されることは、多くの民間伝承の場合は、疱瘡神はまず歓待され、後に見送られるというのが、一般的な習俗ですが、この歌では疱瘡神の追放を歌っています。ただしこの歌をもう一度読んでみますと、別な解釈もできないことはないのです。つまり、「門里ハヨケヨ」という命令形で区切ると、その目的語は疱瘡神ではなく、疱瘡神とは別の悪い疫病神になってくるのではないかと思います。「疱瘡神　無里」、疱瘡神がいない里ならどうでもいいが、疱瘡神がいるこの里は守ってほしい、ということになり、疱瘡神の追放ではなくなってくるわけです。これは非常に大事な点だと思います。それは皆様ご承知のように、疱瘡神は悪神から福神になるという、江戸末期の流行神の伝統的なパターンがここに見られるのです。

この歌については、もう一つの問題が残されています。それは「我名」の「我」です。この「我」は誰かということですが、まず考えられるのは、民間伝承の資料の中によく登場する、半分歴史的な、半分伝説的な人物であります。彼らは何らかの形で疱瘡神と関わりのあった人で、疱瘡神のお世話をした人物なのです。その恩返しとして、疱瘡神が守り札や「咒歌」を教えてくれたという、そのような伝説の中に出てくる人物かも知れないのです。また、歴史的に指摘できるような人物も考えられます。例えば、若狭の小浜の六郎左衛門という実在の人の名前だとも言われています。更に考えられることは、疫病の守護神としてよく知られている牛頭天王とか、天神であります。「我名」という文句はよく牛頭天王の歌に出てきて、「私の名前を書いてある家を守ります」となっているのが普通です。

続いて同じ文献には次の歌があります。

チハヤブル　カミノミズガキノ　ウチナレバ　モ　ハシカトモニ　カルキモノナリ

これは、軽く済むように願われているものです。

次に伝統的な疱瘡の薬療法として、小豆とか甘草とか黒豆などで作られた薬の治療法がいろいろ書いてあります。そして、疱瘡全快の直前に行われる、いわゆ

る笹湯とか酒湯とかいう方法も書いてあります。それに続けて、次のようなちょっと面白い歌も出てきます。

ホウソウノ　ヤドハトトヘバ　アトモナシ　コノトコロニハ　イモ　セザリケリ

疱瘡神はどこに住んでいるかと聞かれれば、ここじゃない。だから疱瘡にもかからないというわけです。

以上の三つの歌から、いろんなことが指摘できると思います。第一は疱瘡にかかる危険を除くこと。疱瘡神を近づかせないという考え方。第二は疱瘡が軽症で済むようにというお願い。第三は疱瘡の痕を残さないということ。つまり、アバタ顔を避けるということです。この三つの目的が大体疱瘡に対する呪的治療法の主なものだと思います。

疱瘡神祭りの一例

修験道の山伏は疫病に関する秘法、唱えごとを多数持っていましたが、民間に行われた疱瘡神祭りに参加することもありました。橋本伯寿という甲斐（山梨県）のお医者さんの『断毒論』という本の中に、その国の疱瘡神祭りの習慣を割と詳

しく記してあります。それによりますと、「ちかごろ疱瘡神祭りは格別に甚だしく」なって、疱瘡の六日に当たる夜には、親類は勿論のこと、いろんな方を家に招待して、お坊さんとか神主さんとか山伏を請ずるのだそうです。そして赤い御幣を立て、疱瘡神のための神棚を作り、疱瘡の重き、軽きの差別もなく、祭りで騒ぐのです。招待された人たちはいろんな土産物を持って来るのですが、その土産物の中には、流行っている当世の錦絵などもあります。そしてその錦絵を病人の寝ている所に置くのです。それとは別に、餅とか菓子とか酒とか他の土産物は、貰った数の多さでその家の面目を施します。

疱瘡絵（一）

では次に『断毒論』という本に記されている、錦絵、いわゆる疱瘡絵の話に移ります。錦絵というと、普通には浮世絵の一種のことですが、ここではもっと狭い意味で、赤絵と称される一色刷りの版画と解釈すべきじゃないかと思います。このような絵は種痘で疱瘡が退治されはじめた江戸末期から明治の初期にかけても、かなり流行していたと思われます。

ここでは東京大学にある疱瘡絵のコレクションを元にして、少しその絵を見て

みましょう。

（スライド―①）

疱瘡絵はそれほど数が多くないのですけれど、いくつかに分類ができると思います。その第一は、病よけと悪魔祓いになるような英雄の像です。ここに示しましたのは、ご存じの源為朝の絵で、疱瘡絵にいちばんよく出てくる歴史的な人物です。まわりに書いてあります歌は、

世の人の　為ともなれと
もがさをも　守らせ玉ふ
運のつよ弓

という歌です。結局これは、為朝と彼の象徴的武器である弓の力で、疱瘡から人を守る力を示しています。

①為朝とつよ弓（東京大学総合図書館）

（スライド―②）

次も為朝の絵ですが、下に疱瘡神が地面に伏していて、悪魔が座っています。まわりの歌は非常に読みにくいものですが、

末の世に　神と祭りし
弓取の　よきおさな子を
我ハ守らん

とあります。これも神として崇められた為朝が病気の子どもを守る誓いであります。だから先に触れました呪的な歌のひとつですね。

（スライド―③）

次のも同じように為朝ですが、これには一つの「しるし」があります。この赤い手形がそうです。これは、疱瘡神が自分が負けた証明としてサインしたという「しるし」で手を置いたのです。これには別な解釈もあります。それは為朝が自分

②為朝の誓い（東京大学総合図書館）

で手形を押したというもので、その手形は本人と同じような威力を持つというものです。他にも加藤清正の手形というのもあります。これが鬼の残した「しるし」だとすると、鬼が「もう疱瘡は流布させない」という約束をした証明だということになります。

③正一位為朝大明神来由（日本医学文化保存会）

（スライド―④）

これは非常に変わったもので、忿怒形の、鬼みたいな武将ですが、為朝のちょっと変わった形だと思います。下は典型的な疱瘡神二人が逃げるところです。こういう場合は、桟俵と御幣を手に持たせていますが、結局、自分を追い出す力を持つ呪的なものです。そして下に小さく書いてあるテキストは、

④疱瘡退除の図（日本医学文化保存会）

「ためともさまや　てのひらのはりガミハ　まいどのおなじミだから　さのミとハ
おそれぬが　こりゃアなんだ　おそろしいものが　てたぞ　うすきミが　わるい
ハ　にげろ〳〵」という文句です。

（スライド－⑤）

次の絵には右側には疱瘡神が二つの形で出てきます。一つは老人の形で、自分で負ける証明書を持っています。もう一つは子供の形で出てきています。二人とも疱瘡神と書いてあります。そしてまわりには、よく疱瘡絵に出てくるおもちゃとかミ

ミズクとか犬やだるまが描かれています。

左側は、鎮西八郎為朝の前に屈伏する疱瘡神が描かれています。この絵は一色刷りではなくて立派な浮世絵です。こういう絵も多少あります。

⑤為朝の前に伏す疱瘡神（東京都立中央図書館）

（スライド－⑥）

次に出てくるのは鍾馗です。鍾馗は中国のもので、玄宗が夢に見た悪魔を追い出す伝説的な人物であります。文字が非常に読みにくいのですが、「疱瘡の　あとなくさめて見し夢の　俤うつる　鍾馗大臣」とあって、最後は全然読めないのですけれど、鍾馗は呪的な先例として考えられます。鍾馗が出てくる例は割と多いのですが、あと一つお見せしましょう。

（スライド－⑦）

これも鍾馗が疱瘡神と疫病神を退治する絵です。このような場面に出てくる歌を見ますと、いろいろな決まり文句のような言葉が出てくるのです。動詞で言えば「治める」とか「鎮く」とか「すむ」というように、疫病をなくするという動詞が、割によく出てくると思います。また、犬が描かれていると、それは「いぬ（去ぬ・往ぬ）」という動詞と同音ということで出てくるのです。犬は「まじない」のところでよく使われた動物で、言語学的に見ますと非常に便利な表象です。

⑥鍾馗の呪力（東京大学総合図書館）

疱瘡絵（二）

（スライド―⑧と⑨）

次は、獅子舞の絵です。まずこの絵を見ますと、「あくまめハ　見られぬ獅子の勇ミ顔」と読めると思いますけれど、もう一つの絵には、「丸一が　軽く取りなす曲鞠の　十二峠も　祝ふ獅子舞」と書いてあります。獅子舞はもちろん正月との

⑦鍾馗と菖蒲刀（東京大学総合図書館）

かかわりで、祭典的、祭り的な性格を持つものですが、もう一方でその力で疱瘡を抑えるという、悪魔祓的な性格も含まれています。

丸一というのは、尾張から出てきた獅子舞の一派です。獅子舞は年中出てきてもいいのですが、いちばん典型的な季節は年末とお正月あたりで、神が来訪する正月に好んで舞い出てくるものです。

この歌でもう一つ問題になるのは、十二峠という言葉だと思います。これがどういう意味かといろいろ苦労したのですが、疱瘡の病の進行の中に山上げという言い方があって、普通山上げと言いますと、六日目か七日目の一番危ない時期を言います。その山上げが無事過ごせたら、その病人の命には危険がないということがよく言われてます。この山上げを十二峠に直接結び付けられるかどうかが問

⑧獅子と悪魔払い（東京大学総合図書館）

題です。

それとは別に、十二峠は十二月じゃないかとも思われます。呪的な考えの上で、一月から十二月まで無事に済んだように、十二峠を越えたということ、一年を無事に越えたということによって、もう疱瘡にはかからないというわけです。こういうふうに十二峠についていろいろ考えられますが、先に申しましたように、分類としましては、こういう絵は祝祭的な性格が強いのです。病気を抑えるのではなくて、その時を良い時期に変質させるのです。それは病気にかかった時をお正月などと関係させて、こんな良い時期に病気はあり得ないという呪的な考え方だと思います。いずれにせよ、上記の歌は病を取り除くことを目的としたものの一つです。しかし同時に吉祥的なものや、縁起のいいものを強調することによって疱瘡に対抗するという意味をもっている

⑨丸一の獅子舞（東京大学総合図書館）

といえます。

（スライド―⑩）

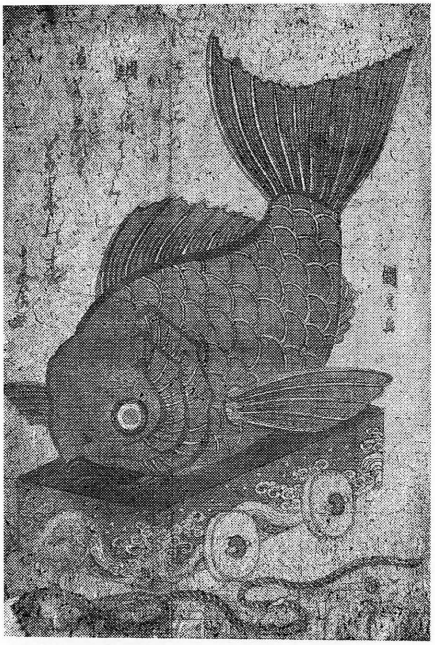
次の鯛もそうです。ピンピン鯛といって、尻尾を撥ね上げた鯛です。そこに「小つつみの　かはりに鯛を　脇はさみ　千万恵びす　万歳の春」と書いてありますが、鯛はもちろん「メデタイ」との同音ということで疱瘡絵に出てくる動物です。万歳が出てくるのはお正月との結び付けです。正月の呪的な力を借りてということです。

（スライド―⑪）

ここは、

早咲の　梅のつぼミも

二ツ三ツ　雪に色よき



⑩たいぐるま（東京大学総合図書館）

犬のあし跡

と書いてあります。雪の下で花開いたばかりの梅は春の訪れを告げるものですが、蘇る命とか、新年という観念を表わしています。言い換えれば、再生の象徴です。そして蕾の赤い色はまた、呪的な効果を裏付けるもので、犬もさっき申し上げましたように「いぬ」という動詞と同音のために出てくると思います。新年というめでたい時期ですから、疱瘡という恐ろしい病気は当然出て来ません。

同じようにお正月と結びついている絵として次のものがあります。

⑪早咲きの梅（東京大学総合図書館）

（スライド―⑫）

これは『桃太郎』の絵ですが、

蓬莱の　山のはつ日と
さながらに　玉の春たつ
桃太郎の月

完全に消えているところがあって、ちょっと読みにくいので、他の文献でもう少し調べなければいけないのですが、ここで蓬莱山の初日といっているのは、完全にお正月と結びつけられているのです。また桃太郎の月というのは、まず桃が呪的なものであるということ、桃太郎の月が一番目の月、すなわち正月ということで、呪的な意味が重ねて出てくると思います。

⑫蓬莱飾りと桃太郎（東京大学総合図書館）

疱瘡絵（三）

三番目のグループは、遊びとか健康を強調するグループです。こういう絵があります。

（スライド－⑬）

軽くと　すみて子供の　異勢よく　万々年も　祝ふ目出たさ

という歌が書いてある絵です。「異勢よく」とは、力に溢れて体力のある子供、そういう子供は疱瘡にかからない、健康であるということを示しています。また、このような歌には、「元気よく」とか「元気よき」とかいうように、「よき」という言葉が繰り返されています。こうした言葉は健康だけじゃなくて、

⑬子供とたいぐるま（東京大学総合図書館）

遊戯的な面も強調していると思われます。元気で遊んでくれる子供は病気にならないということです。

（スライド－⑭）

おもちゃを持って遊ぶ子供の絵には、よくだるまも出てきますが、このだるまの絵には「起たかる　貌のやさしき　たるまかな」と書いてあります。いつも起き上がるだるまは病気から立ち直るというシンボリズムを持つ道具ですから、必ず病気や疫病の時には出てくるのです。なお、多くの絵に出てくる黒い線ですが、いろいろな文献を調べてみますと、薬をいちばん危ないところやいちばん気になるところにつけると、

⑭達磨（東京大学総合図書館）

そこが守られるという意味で、黒い線を呪的なつもりで描きいれたのではないかと思います。だいたい目と鼻と口あたりが多いようです。

またこういう遊戯的で健康を強調する絵の中にはよく「笑う」とか「遊ぶ」とかいった動詞が出てくるのです。それはあくまでも、「笑う」子供は病気じゃない、「遊ぶ」子供は病気にならないということです。中には、「よき」をもって遊ぶと書いてあるものがありますが、それは金太郎のまさかり〔斧〕のことです。まさかりを持って遊ぶ子供、すなわち金太郎は健康な子供の象徴ですから、これも結局病気を乗り越える力を示しているのです。

（スライド―⑮）

この絵では、子供たちが元気に逆立ちしたり、犬に乗ったりして元気に遊んでいることを示しています。そして

張秡の　達磨も犬も　疱瘡の　見舞にかるき　手遊ひにして

とはっきり書いてあります。

こういう絵には、「山を越える」という言葉もよく出てきますが、この「山を越える」は、当然病気の経過の山上げと関係している事です。具体的な山としては、

疱瘡絵には蓬莱山と富士山がよく出てきますが、富士山がいちばん多いようです。

⑮子供と玩具（東京大学総合図書館）

（スライド―⑯）

をさな子か　きけむ遊ひの
手にかろく　山もあけたる
はりぬきの不二

と書いてあります。為朝とだるまと金太郎が出てくるわけです。

⑯おさな子と山上げ（東京大学総合図書館）

疱瘡絵（四）

（スライド―⑰）

次も同じような絵ですが、歌には、

疱瘡も　三国一の　かろ〳〵と　ふしの山をも　上る力童

とあります。このテキストで注目すべきは、「軽い」という性格を強調していることです。これが、「軽々と」という言葉が決まり文句としてよく出てくる四番目の

グループです。

例えば次のものにも見えます。

⑰富士をも上げる子（東京大学総合図書館）

（スライド―⑱）

かるくと　斧（ヨキ）もてあそぶ　疱瘡が子ハ　山あけるさへ　あしのはやさよ

まさかりを持った金太郎の絵ですが、これも「軽さ」を強調する絵です。さっきも申し上げましたように、疱瘡は止むを得ない病気でしたから、できれば「軽く」済ませてほしいという祈願の心が入っている例です。

おわりに

最後に疱瘡絵に見られる呪的なテキストを検討しますと、普通の呪歌と疱瘡関係の呪歌とは、それほど違いがないと思われますが、いくつかの心理的な、また文献学的な要素を見分けることができると思います。厳密に数量的な分析をすることは、資料の数が全然足りないので、ちょっと無理だと思いますが、今まで見てきた疱瘡絵について言えることは、ある意味で意義深いものだと思います。

⑱斧もてあそぶ子（東京都立中央図書館）

それは一つに、疱瘡という病を直接取り去ろうというような、そういう悪魔祓い的な戦いを表現する絵が少ないということです。そしてもう一つは、「遊んで」とか「元気よく」とか「笑う」とかいうように、子供たちが「遊びながら疱瘡をする」という言葉がよく出てくるということです。一応、このようなテキストを持つ絵は多いということが、言えるのではないかと思います。

それは何故かと言いますと、呪的な考え方というよりも、経験的な考え方に重きを置いているからです。疱瘡は何をしてもさけられない病気だったので、病気になっても軽く済むように祈願したのです。民間伝承の諸文献の、その軽く済むようにという祈願の中で、疱瘡神自身のイメージは変わっていったのです。疱瘡神は人間にとって必要である病気を持ってきてくれる神になり、拒否すべき悪い疫病というより、人間が一生に一度、付合わなければならない病を持って来るというイメージになっていたのです。そしてそれは重いものじゃなくて、軽く済ましてくれるのが、疱瘡神の役割になったのだと思います。その意味で疱瘡神は、福神として、良いことを持ってきてくれる神として祀られたのではないかと思います。

まとまりのない話になりましたが、これで終わらせていただきます。

図版①～⑱は『図説日本の仏教第五巻　庶民の仏教』（平成二年・新潮社）所載の図版を出版社のご厚意により転載させて頂きました。

＊＊＊発表を終えて＊＊＊

日文研フォーラムでの講演は、お集まり下さった方々が全て、民間信仰専門家であるかの様に見えました。その上、大変熱心に聞き入って下さいました。そんな雰囲気の中で今迄には、研究対象にされていなかった疱瘡絵を紹介し、その絵を通して日本の神観念までも愚かしく話させて頂きました。

困難な日本語によって研究発表をする事は、又その時に適確な質問が四方八方から浴びせられてくるのは、自分の研究の弱点と不足をより明確にさせられる事として、いつもより痛感しているのですが、そのような意味で私は、この講演を終えた時、安堵と感謝の気持を味わったものでした。

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ（ピサ大学助教授） Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン（日文研客員助教授） Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン（大阪大学助手） Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ（日文研客員教授） Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋　彙七（慶北大学校師範大学副教授） SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト（ウィーン大学教授） Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア（テキサス大学助教授） Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ（オベリン大学助教授） James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」

⑨	元. 2.14 (1989)	厳　安生（北京外国語学院日本語学部助教授） YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉　敬文（遼寧大学日本研究所副所長） LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ（オベリン大学助教授） Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏　剛（京都工芸繊維大学助教授） HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント（東洋大学助教授） Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ（ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授） KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド（フランス国立高等研究院教授） Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪　向榮（中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授） WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント（ミネソタ大学助教授） Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ（フランス国立科学研究所助教授） Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2．1．9 (1990)	スミエ・ジョーンズ（インディアナ大学準教授） Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2．2.13 (1990)	カール・ベッカー（筑波大学哲学思想学系外国人教師） Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2．4.10 (1990)	グラント K．グッドマン（カンザス大学教授・日文研客員教授） Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2．5．8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ（スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2．6.12 (1990)	リヴィア・モネ（ミネソタ州立大学助教授） Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2．7.10 (1990)	李　国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師） LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉕	2．9.11 (1990)	馬　興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉖	2.10．9 (1990)	ケネス・クラフト（リハイ大学助教授） Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ（カイロ大学講師） Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
㉘	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ（カレル大学日本学科長・日文研客員助教授） Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
㉙	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン（ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員） Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト（ワーゲニンゲン大学研究員） Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
㉛	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ（ワルシャワ大学教授・日文研客員教授） Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー（オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授） Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
㉝	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ（ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授） Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント（フンボルト大学教授・日文研客員教授） Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鴎外記念館」

㉟	3．9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス（琉球大学助教授） Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
36	3.10. 8 (1991)	王　暁平（天津師範大学助教授・日文研客員助教授） WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
㊲	3.11.12 (1991)	辛　容泰（東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員） SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
38	3.12.10 (1991)	洪　潤植（東国大学校教授） HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
㊴	4．1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン（デリー大学教授・ 日文研客員教授） Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4．3.10 (1992)	ジャン＝ジャック・オリガス （フランス国立東洋言語文化研究所教授） Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
㊶	4．4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー（プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授） Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4．5.12 (1992)	ポール・マッカーシー（駿河台大学教授） Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4．6．9 (1992)	G．カメロン・ハーストⅢ（ニューヨーク市立大学リーマン広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長） G．Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へ－徳川時代における武芸の発達－」
44	4．7.14 (1992)	杉本　良夫（オーストラリア・ラトローブ大学教授） Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
45	4．9．8 (1992)	王　　勇（杭州大学日本文化研究センター教授・日文研外国人研究員） WANG Yong 「中国における聖徳太子」
㊻	4.10.13 (1992)	李　栄　九（大韓民国中央大学教授・日文研客員教授） LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
47	4.11.10 (1992)	ウィリアム D．ジョンストン(米国ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D．JOHNSTON 「日本疾病史考 －『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」

○は報告書既刊

****
発 行 日　1993年6月10日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048

問 合 先　国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課
****
©1993　国際日本文化研究センター

■ 日時

1989年9月12日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部